



『平泉 - 浄土思想を基調とする文化的景観 - 』

概 要

2007年3月

目 次

・ 資産の内容	1
1 中尊寺	1
2 毛越寺	3
3 無量光院跡	4
4 金鷄山	5
5 柳之御所遺跡	5
6 達谷窟	6
7 白鳥館遺跡	6
8 長者ヶ原廃寺跡	7
9 骨寺村荘園遺跡と農村景観	7
・ 歴史	9
1 資産の歴史	9
2 国外において果たした役割	12
3 国内において果たした役割	13
4 資産の研究に関する歴史	15
・ 平泉の評価	17

・資産の内容

1 中尊寺

中尊寺は、平泉の中心部北側の関山丘陵に位置する。奥州藤原氏初代清衡が、平泉において、日本の北方領域における政治・行政上の拠点的形成するのに当たり、12世紀初頭から四半世紀をかけて、その精神的な中核として最初に造営した寺院である。清衡は、それまで支配下にあった江刺郡豊田館から、奥六郡の南限に当たる衣川を越えてさらに南へと進出し、関山丘陵に中尊寺を造営したのであった。中尊寺の建立に係る「中尊寺供養願文」(以下、「供養願文」という。)には、「蝦夷」の征討以来、奥州での多くの戦いで亡くなった人々の霊を敵味方の区別なく浄土へと導き、辺境の地と言われた陸奥に仏国土(浄土)を造ろうとした強い願いが示されている。中尊寺は、法華経の理念に基づいて、清衡による国土建設の中心として位置付けられており、さらに、政治・行政上の拠点である平泉の北の出入り口を固める重要な役割を担わされていた寺院である。

12世紀末の中尊寺には、40に及ぶ寺塔と300にのぼる禅坊(僧侶の住む個室)があったとされ(『吾妻鏡』)。北を衣川によって限られた関山丘陵(標高30~150m)に多数の平坦面を造り出し、多くの寺塔が設けられていた。

境内は、中尊寺と支院境内が位置する北丘陵と山林が中心となる南丘陵に二分される。これらの2つの丘陵の間を桜川が東流し、高館の北を通って北上川に注いでいる。北丘陵には、月見坂と呼ぶ杉並木の表参道が、東麓から尾根づたいに西に向かって上っている。急坂を登りつめると、平坦に開けた場所に本堂などの歴史的建造物などがあり、境内の地下には大池・三重の池などの園池跡や礎石建物跡が埋蔵されている。

中尊寺の諸堂は、1337年に金色堂と経蔵の一部を残して焼失した。近世には、仙台藩主伊達氏の庇護の下、現在に残る建造物や月見坂などの参道が整備されていった。現在、中尊寺境内には本坊と17の支院、白山神社が存在し、今日においてもなお活発な宗教活動が行われている。

発掘調査は、1953年から現在までに計69回に及ぶ。発掘調査の結果、かつての寺院の様相を知ることのできる礎石建物跡・掘立柱建物跡・堀跡・園池跡・道路跡・井戸跡などの各種の遺構が検出され、多くの遺物が発見されている。12世紀前半に「鎮護国家大伽藍一区」(「供養願文」)が建立されたとみられる個所には大池跡があり、発掘調査により、玉石による石組護岸の園池であることが判明した。大池跡は長径約120m、短径約70mの不整円形を成し、中央に中島を擁し、西側に伽藍を配置する浄土庭園であったと考えられる。

境内には、中尊寺金色堂・金色堂覆堂・中尊寺経蔵・願成就院宝塔・釈尊院五輪塔・白山神社能舞台など、国宝及び重要文化財に指定されている6件の建造物が存在する。

1-1 中尊寺金色堂

中尊寺境内の北西側に位置する阿弥陀堂建築である。創建年代を示す棟木銘(1124年)から、国内に現存する数少ない同形式の阿弥陀堂建築の中でも最古のものである。藤原氏四代(清衡・基衡・秀衡・泰衡)の遺体及び首級(ミイラ)を安置した霊廟であり、政治・行政上の拠点である平泉において信仰の起点となった重要な施設であるとともに、今なお地域における精神的な拠り所ともなっている。

金色堂は、一辺5.48mの方3間の規模で、屋根は単層宝形造、本瓦形板葺の木造建造物である。中心に当たる方1間の部分に阿弥陀三尊像を祀っている。

金箔の装飾、蒔絵・螺鈿などの漆芸・金工の意匠・技術を尽くした金色堂は、国内に現存する

12世紀の数少ない阿弥陀堂建築の中でも最高傑作を誇る。金色堂が12世紀の姿を現在にとどめる建築物であることは、1962～1968年に行われた金色堂保存修理工事の成果から明らかであり、現状の意匠・形態が鎌倉時代の記録である『吾妻鏡』の記載と一致することからも証明される。

屋根板を除く全ての部材の外面に黒漆を塗り、金箔を押ししている。建物の部材に用いられた東南アジア産の紫檀・赤木、螺鈿に用いられた南海産の夜光貝などは、12世紀に国内外に及ぶ広い範囲の交易・交流が行われていたことを示している。組物は七宝沃懸地に夜光貝の螺鈿による宝相華唐草文で埋め尽くされ、長押は宝相華唐草文の地を緑青で埋め、中央には碧瑠璃が嵌め込まれている。

堂内に立つ4本の柱は、蒔絵技法による48体の菩薩画像や螺鈿による宝相華唐草文が施された巻柱である。巻柱は、木割れを防ぐために八角形の心木に8枚の材を打ち回したものである。堂内には、格狭間の孔雀と宝相華を意匠した3つの須弥壇が置かれている。各壇上には、西方浄土世界の阿弥陀如来坐像を中心として、2躰の脇侍の観音菩薩立像・勢至菩薩立像、6躰の地藏菩薩立像、2躰の天王立像など国宝に指定された一群の仏像が安置されている。

3つの須弥壇内にはそれぞれ1つづつ棺があり、中央壇に初代清衡の遺体、向かって左側の壇（西南壇）に二代基衡の遺体、向かって右側の壇（西北壇）に三代秀衡の遺体と四代泰衡の首級（頭部）がミイラとなって納められている。当初は中央壇に清衡棺が納められ、後に両脇の西南壇・西北壇が増設され、基衡・秀衡の棺が納められた。もとは阿弥陀浄土を観想するための仏堂として造られた金色堂は、歴代奥州藤原氏の遺体を祀ることにより、霊廟としての性質を併せもつこととなった。中央壇にある清衡の金箔押木棺からは副葬された金塊も発見されている。

1934年に平泉を訪れた世界的建築家ブルーノ・タウトは、その著書『日本 日記 1934年』において、金色堂を「藤原氏累代の葬堂で、形こそ小さいがまさに珠玉」、「実に驚嘆に値する建築」と絶賛している。1950年に行われた奥州藤原氏四代の御遺体学術調査、1962～1968年に行われた金色堂保存修理工事は、ともに大きな学術的成果をもたらし、人類学・歴史学・建築史学・美術史学など多方面に寄与するところとなった。

1-2 金色堂覆堂

現在のコンクリート造覆屋が建造される以前に金色堂を保護していた木造の覆堂で、中尊寺境内の北西側に位置する。奥州藤原氏が滅亡した100年後に当たる1288年に、鎌倉幕府によって造営された。奥州藤原氏への供養の意味が込められたもので、初めは簡易な形式の覆屋であったものと推定されている。現存する覆堂は、その様式から15世紀頃に建築されたものと考えられている。規模は、方5間、屋根は宝形造・銅板葺、正面を吹放しとし、内部には柱が無い側柱だけから成る建物という特徴を持つ。1962～1968年に行われた金色堂保存修理工事に際し、金色堂を永久保存するために新覆堂（コンクリート造）が新たに建設されたことに伴い、現存する覆堂は北東約90mの現在の位置に移築された。通常、覆堂は、建て替えられて古いものが残りにくい性質を持つが、金色堂を長期間にわたって風雪から護ってきた現存する覆堂は国内最古の覆堂であり、木造建築の保護の在り方を示すものとして、その価値は極めて高い。

1-3 中尊寺経蔵

中尊寺境内の北西側に位置し、寺伝によると国宝である「紺紙金銀字交書一切経」、「紺紙金字一切経」などが納められていた木造建造物である。現経蔵は、1122年に完成した2階建て経蔵の下

層部分を 14 世紀頃に建て直したものとされている。経蔵は一辺 7.72m の方 3 間の規模を持ち、屋根は宝形造・銅板葺で正面に向拝 1 間が取り付き、内部には三方の壁面に経典を納める経棚が 7 段にわたって巡らされている。現存する国内最古の棟札（1122 年）を持つ建築物である。

1 - 4 願成就院宝塔

中尊寺境内北西側の願成就院の飛地に位置する願成就院宝塔は、塔身部が水瓶形を成し、塔身部の四方の側面に梵字が刻まれた石塔である。高さ 125.7cm で、材質は安山岩である。12 世紀に造られたものと考えられる。塔身を円柱形にし、屋根より上部を五輪塔形に造った独特の形態から、「平泉型宝塔」と呼ばれている。平泉では同形態の石塔が他にも確認されており、平泉に定着した石塔文化の特質を示している。

1 - 5 釈尊院五輪塔

中尊寺境内西側の釈尊院の前方に位置する五輪塔である。供養塔の一種で、下から地・水・火・風・空を表す五輪の石を積み上げた塔であるが、釈尊院五輪塔は風輪を失っている。高さ 149.0cm で、材質は凝灰岩である。水輪の四面には梵字が刻まれており、地輪下の台石側面に「仁安四年」（1169）の紀年銘が刻まれている。紀年銘を持つ五輪塔としては国内最古のものであり、基準資料として価値が高い。

1 - 6 白山神社能舞台

中尊寺の北方の鎮守を成す白山神社の境内に存在する能舞台である。1849 年に焼失した後に、仙台藩が 1853 年に再建したもので、舞台及び楽屋、橋掛、鏡の間から成る。能舞台は白山神社社殿の南側に位置し、舞台及び楽屋は東西に長い入母屋造、茅葺の木造建造物で、西半が舞台、東半が楽屋となっている。舞台と楽屋の間に設けられた後座の北面に橋掛が取り付き、北東側に延びて社殿の鏡の間に接続する。近世の能舞台としては正式かつ本格的な規模・形式を持ち、東日本で唯一の事例である。既述のブルーノ・タウトは、その著書『日本 日記 1934 年』において、「この田舎風の典雅な建築物は、中尊寺で最も強い印象を与えるものである」と白山神社能舞台を絶賛している。能舞台では、現在でもなお毎年 5 月に古実式三番と神事能、11 月に能楽などの年中行事が執り行われている。神事能が中尊寺一山の僧侶によって演じられてきたことは、能舞台が存在する白山神社が中尊寺鎮守としての重要な意義を持っていたことを示している。

2 毛越寺

平泉の中心部の南側に位置する寺院である。京都東山に天皇家の御願寺として造営された法勝寺を模範として、奥州藤原氏二代基衡が 12 世紀中頃に造営したとされている。毛越寺の設計に際しては、金鶏山の山頂から南に延びる南北線を意識した軸線が設定されている。平泉の南域を形成する際の起点となり、平泉の南の入り口の役目を担う寺院として重要な意味を持っていた。

12 世紀末の毛越寺には、40 に及ぶ堂塔と 500 にのぼる禅坊が存在したとされている(『吾妻鏡』)。壮麗さにおいては国内で並ぶものがないと評された金堂円隆寺は北側の塔山を背景として建てられ(『吾妻鏡』)、その南側に園池を造成した。毛越寺伽藍の全容は、12 世紀後半には完成していたものと推定される。

境内は、主要堂塔と庭園から成る区域(標高 35m)と、その北側に位置する塔山(標高 121m)

などの丘陵の区域から構成される。堂塔と庭園から成る区域は、金堂円隆寺を中心に、西に嘉勝寺、後方に講堂、東に常行堂・法華堂などの主要伽藍が建ち並び、円隆寺の南側には園池である大泉が池が設けられていた。さらに、その南側には南大門が建ち、平泉において道路設定の基準ともなった東西大路に面していた。

毛越寺境内の東には、幅 30mの南北大路を介して、かつては観自在王院の境内が接していた。観自在王院は、基衡の妻が自らの居所を寺としたもので、敷地の北側に大阿弥陀堂・小阿弥陀堂などの主要堂塔が建ち、その南側には大きな園池が設けられていた。

1226年に円隆寺が焼失し、1573年には毛越寺南大門と観自在王院が焼失した。また、1597年には毛越寺常行堂と法華堂が焼失した。江戸時代に入ると、仙台藩主伊達氏の庇護を受けることとなり、1732年には仙台藩主伊達氏によって現常行堂が建立された。毛越寺は、現在、特別史跡の指定地の内外に存在する17支院とともに、その法灯を現在に伝える寺院であり、境内の常行堂では毎年1月に重要無形民俗文化財に指定されている「毛越寺の延年」が行われるなど、様々な宗教行事が現在も活発に行われている。

主な発掘調査は、1930年に金堂円隆寺跡、1955～1958年に主要伽藍と庭園、1980～1990年に大泉が池をそれぞれ対象として実施された。その結果、円隆寺と嘉勝寺の本堂跡・翼廊跡・経蔵跡・鐘楼跡、講堂跡、常行堂跡、法華堂跡などから成る伽藍の礎石や基壇が検出された。その他にも、土塁跡又は築地跡、南大門跡、東門跡などについても発掘調査が行われた。大泉が池の発掘調査では、北東岸において導水のための遣水を発見したほか、西南岸の池尻においては排水溝を発見した。特殊な遺構としては、園池の北岸に当たる仏堂前面において、幡などを立てたと推定される一群の柱穴跡も発見されている。毛越寺境内と、これに隣接する観自在王院境内との間には、南北方向の大路と牛車を格納する車宿の跡が発見されている。

構成資産である毛越寺の要素には、鎮守社跡をはじめ8箇所の関連遺跡が存在する。北野天神社・八坂神社・王子社跡は、平泉を守護する四方の鎮守社（『吾妻鏡』）のうち、それぞれ西方と南方の鎮守社又はその跡であった可能性がある。鎮守社の一つと推定される白山社は一辺約80mの方形区画を成し、高さ2m以上の大規模な土塁が西・北・東の三方をコの字形に取り囲み、幅約20mの堀跡が北・東を巡る。これまでの発掘調査により、境内の南半部において石積護岸の園池跡が発見されたほか、現境内における参道の南への延長線上に橋脚と考えられる柱根列が発見された。

毛越寺境内には、以下に述べるように、特別名勝に指定されている毛越寺庭園と名勝に指定されている旧観自在王院庭園の2つの庭園が存在する。

2-1 毛越寺庭園

毛越寺境内において、大泉が池を中心として浄土の世界を具現化した独特の信仰の空間である。

1980～1990年に、大泉が池の汀線の復元整備を目的として発掘調査が行われた。大泉が池は東西約190m×南北約60mの規模を持ち、洲浜・出島・立石・築山など多様な構成要素から成る。東岸には優美な海岸線の風情を漂わせる緩やかな曲線の洲浜が入江を形造るほか、南東岸には波が多く岩石の多い海岸である荒磯を表現して高さ約2mの立石を中心とする出島があり、南西岸には荒々しい岩肌が断崖の風情を漂わせる高さ4mの築山がある。北東岸には北から遣水が注ぎ、水は池中を東から西へと流れた後、池尻に当たる西南岸から排水される。遣水は長さ約80m、幅約1.5mあり、庭園における流れの遺構としては日本で最長を測る。発掘調査によって12世紀に

造られたままの状態地下に残されていたことが明らかとなり、1988年に再生された。これらの庭園の諸要素に見る意匠・工法は、11世紀後半の作庭書である『作庭記』にも記されているように、自然を尊重し、自然に習うという考え方に基づくものである。園池の中央には中島があり、その南と北には2基の木橋の遺構が発見された。また、園池の北岸では、幡などを立てたと推定される特殊な柱穴跡も5基並んで発見された。南大門跡、中島、2基の橋の橋脚、幡などを立てたと推定される一群の柱穴跡、円隆寺金堂跡を結ぶ伽藍の中軸線は正しく南北方向に一致し、さらにその北側に当たる伽藍の背後には塔山が控えている。園池のみならず、仏堂の周囲を含め、伽藍の全域が小さな礫で覆われ、朱塗柱に輝く仏堂や緑成す背後の塔山との色彩的対比は、浄土の世界こそかくやと思わしめるものであったに相違ない。

このように、毛越寺庭園は、左右対称形の翼廊を伴う仏堂の南側に園池を設け、仏堂背後の塔山と一体となって浄土世界の具現化を意図して造られた浄土庭園であり、12世紀の様相を完全な形で現在に伝える点で、日本庭園史上におけるその価値は計り知れないほど高い。

なお、現在、毎年5月には、再生された遣水を使って9～11世紀の優雅な歌遊びを再現した曲水の宴が行われている。

2-2 旧観自在王院庭園

基衡の妻が建立したとされる観自在王院跡の庭園は、幅30mの南北大路を挟んで毛越寺境内の東隣に位置する。

発掘調査の結果、舞鶴が池と呼称される園池は東西・南北約100mの規模を持ち、毛越寺庭園の大泉が池とは異なって玉石護岸が施されていない比較的簡素な意匠の園池であったことが判明した。舞鶴が池の名称は、「池は鶴か亀の形に掘るべし」と記す『作庭記』の記述に由来するとも言われている。汀線の意匠が簡素であるのに対し、西岸の中央部付近には大型の景石を用いて豪快な滝石組が設けられている。池の水源は毛越寺境内の北東隅に位置する弁天池で、毛越寺と観自在王院との境界に位置する幅30mの南北大路を横断する石組みの水路により導水されている。園池の中央には中島が存在するが、中島へ通ずる木橋の橋脚は検出されていない。園池の北側では、大阿弥陀堂及び小阿弥陀堂の痕跡を示す礎石が発見されている。また、園池の南側では邸宅に付属する棟門跡が確認されており、基衡の邸宅を妻が建て替えて寺とした可能性も指摘されている。

このように、旧観自在王院庭園は、大小の阿弥陀堂の南側に園池を設け、背後の金鶏山と一体となって浄土の世界を具現化することを意図して造られた浄土庭園である。

現在、阿弥陀堂では、毎年5月の基衡の妻の命日に、その死を悼む「哭き祭」が行われている。

3 無量光院跡

無量光院跡は、平泉中心部の東側に位置する。奥州藤原氏三代秀衡が12世紀後半に建立した寺院跡であり、周辺の景観と一体となって造営された独特の信仰の空間である。

無量光院跡の西方には金鶏山が位置し、東に接して秀衡の常の居所である「加羅御所」が存在する。無量光院は、宇治の平等院を模して造られたとされている(『吾妻鏡』)が、発掘調査により、宇治平等院よりも深化した造形理念の下に造営されていたことが判明している。

発掘調査の結果、無量光院の区画は、南北約320m、東西約230mの長方形を成し、西・北・東に土塁が巡る。西側の土塁は高さ約5m、長さ約250mに及ぶ長大なもので、外側には堀を伴

うことが判明している。南側には土塁の痕跡が認められないため、板塀などで区画していた可能性もある。区画の内部には、梵字が池と呼ぶ園池に大小2つの中島を設けている。西側に位置する大きな島には左右対称形の翼廊を伴う仏堂が東面して建てられていた。仏堂は平等院と同規模であるが、翼廊のうち南北の部分が平等院よりも1間長く、仏堂の背後に尾廊を伴わないことが判明している。東側に位置する小さな島には、東方建物・中間建物・西方建物の3棟の礎石建物を配置し、東からそれぞれ楽屋・拝所・舞台の機能を持つ建物と推定されている。無量光院は周囲を土塁・堀が囲むなどの独自の構造を持ち、平等院では池の東岸に仮設されていた拝所が池中の小さな島の上に常設されるなど、平等院と比較して独特の配置構成が見られる。また、出土遺物には、かわらけや金銅製透彫瓔珞などがある。

無量光院跡の2つの中島に設けられた建物群は、背後に位置する金鶏山の山頂と東西の中軸線を揃えており、東側の中島から西の仏堂を見上げると、年に2度、4月と8月に仏堂背後に位置する金鶏山の山頂に日輪が沈む。浄土思想による東西の軸線を基準として、仏堂・園池・自然の山が一体となって形成する独特の空間構成は、西方極楽浄土の世界を現世において観想することを目的として造られたものである。仏堂内の四壁には浄土三部経の一つである「観無量寿経」の大意が描かれ、秀衡自らが描いた「狩獵の躰」が含まれていたとされている(『吾妻鏡』)。このように、西方の金鶏山が背後に控え、園池に浮かぶ大小2つの中島に翼廊付仏堂と拝所をそれぞれ設けた無量光院跡の空間構成は、自然環境とも一体となって具現化された浄土庭園の最高の発展形態として貴重である。

無量光院跡の12世紀以後の経過について記録は一切残っていないが、発掘調査の結果、13世紀中頃に伽藍が焼失したものと推定されている。現在、園池跡は水田と化しているが、中島・礎石、土塁・堀跡などが現地形として良好に残り、地下にも橋脚跡などの遺構が良好に残っている。

4 金鶏山

金鶏山は平泉中心部の西側に位置し、平泉に政治・行政上の拠点形成の際に基準となった重要な山である。釈迦の入滅後、人々は末法思想の流行に伴って仏法が衰退することを恐れ、天界において修行を続ける弥勒菩薩の下生の時まで経典の継承を確実にするために、各地に経塚を営んで埋経を行った。奥州藤原氏もまた、金鶏山の頂上に経塚を営んだ。

金鶏山の山頂は、毛越寺の東側を画する南北築地塀の北の延長線上に位置し、無量光院跡の大小2つの中島に建てられた建物の東西中軸線の西への延長線上に位置する。

現在の金鶏山は、標高98.6m、山麓との比高は約60mの小独立丘であるが、円錐形の優美な山容を成し、山頂からは中尊寺・毛越寺・無量光院跡・柳之御所遺跡などをほぼ見渡すことができる。

金鶏山の山頂には少なくとも9基の経塚が営まれていたことが明らかとなり、埋経に用いられた銅製経筒や陶器壺などが発見されたほか、12世紀前半～後半に及ぶ国産陶器類が出土した。歴代の奥州藤原氏が金鶏山の山頂に経塚を継続的に営み、政治・行政上の拠点施設の構成要素である複数の寺院の計画線を金鶏山の山頂に揃えたという事実は、奥州藤原三代が金鶏山を信仰の山として重視していたことを明確に示している。

5 柳之御所遺跡

柳之御所は平泉の政治・行政上の中核的施設を成す政庁跡であり、平泉中心部の東側を流れる

北上川と西側の猫間が淵の低地に挟まれた標高 22～30mの段丘の縁辺部に立地する。北西から南東の方向に細長い区画を成し、最大長約 750m、最大幅約 220m、総面積約 11 万㎡である。計 58 回に及ぶ発掘調査の成果によると、12 世紀初頭に造営が開始された平泉の政庁の様相を今日に伝える貴重な考古学的遺跡であることが明らかとなった。

柳之御所遺跡は、遺跡の南東部分に当たり、堀跡で囲まれた遺跡全体の約 2/3 に相当する区域と、その北西側に当たり、堀の外側に展開する区域に分かれる。堀に囲まれた区域では、道路状遺構・堀跡・掘立柱建物跡・竪穴建物跡・園池跡・井戸跡などの各種遺構が確認された。堀跡は幅約 10m、深さ約 2.5mで、全長 500mにも及ぶものと想定されている。東と南の堀跡には、堀に囲まれた区域において確認された道路状遺構に連なる橋脚跡が確認された。堀で囲まれた区域の内部には堀で囲まれた区画があり、区画内の北半部には建物群が、南半部には園池が、それぞれ設けられていた。建物は掘立柱形式で、寺院で発見されている建物跡が礎石建物形式であるのと対照的である。園池の北側約 20mの付近には比較的規模の大きな建物が密に分布し、区画の中でも中心的な部分を構成している。大型建物の構造は四面庇を伴うものが多く、中には面積が 200 ㎡以上にも及ぶものがある。中小規模の建物は大型建物の周辺に分布し、道路に柱通りを揃えて整然と建てられているものが多い。園池には少なくとも 2 時期以上の改修痕跡が認められ、同一地点において造り替えていることがうかがえる。旧期の園池は素掘りで、新期の園池は旧期の園池の規模を拡大し、中島を設けるとともに、汀線の随所に景石を配した形態へと造り変えられたものと考えられている。堀に囲まれた区域の外側に当たる北西の区域では、西の中尊寺金色堂の方向に向かって伸びる幅約 7 mの道路の跡が発見されている。道路を挟んで両側の地域には、方形の区画が並んで展開していることが確認されており、堀に囲まれた区域とも密接に関連する家臣の屋敷地跡と推定されている。

出土遺物の多くは 12 世紀のものである。儀式などの宴会に用いられた 10 t 以上もの膨大な量のかわらけが出土しており、京都の貴族との間に展開した文化交流の痕跡を示している。他に、中国産の白磁四耳壺や青白磁の陶磁器類、奥州藤原氏が支配下にある人々に絹布を給したことを示唆する「人々給絹日記」が墨書された折敷及び建築部材などの様々な木製品、この時期の「村印」としては国内初の発見となった銅製の印章、奥六郡のさらに北方に展開する社会との深い繋がりを示唆する内耳鉄鍋、産金の様相を伝える溶解した金付着礫、内面に金が付着した片口鉢の破片なども出土している。さらに、埴塙の破片、鑿・金槌など、金属製品の製作に関わった工人や大工の存在を示唆する遺物も出土している。このように、柳之御所遺跡は多くの物資が集まる平泉の交易・交流の結節点でもあった。

現在、堀に囲まれた区域は、「平泉館」と呼ぶ奥州藤原氏の居館（政庁）跡に比定されている。「平泉館」は、中尊寺金色堂とともに、奥州藤原氏の祖先崇拜における精神的な紐帯を成した施設と考えられる。「平泉館」は、1189 年の文治五年奥州合戦により奥州藤原氏が滅亡したのに伴って焼亡し、政庁としての機能を失ったとされている。現在、柳之御所遺跡の地下には当時の遺構・遺物が良好な状態で保存されている。

6 達谷窟

平泉の中心部から西へ約 6 km 付近に位置する寺院である。9 世紀初頭に征夷大將軍坂上田村麻呂が蝦夷討伐の戦勝と仏の加護への祈願を込めて、京都の鞍馬寺から多聞天（毘沙門天）を勧請し、毘沙門堂を建立したのが始まりと伝えられている。1189 年には、源頼朝が文治五年奥州合戦

の帰路に参詣している（『吾妻鏡』）。達谷窟付近の現在の道路は、太田川と丘陵とが接する地形的な制約により大きく屈曲しており、12世紀の日本の北方領域における南北幹線道であった「奥大道」と重なっているものと推測される。達谷窟は、政治・行政上の拠点である平泉と周辺の地域とを結び奥大道の沿線に位置し、交通の要衝を成す重要な寺院であった。

発掘調査の結果、達谷窟は12世紀後半に繁栄していたことが判明している。毘沙門堂の南側に位置する現在の蝦蟇が池は、往時には池中の中央に中島を擁し、玉石護岸を伴う園池であったことが判明しており、仏堂の前面に設けられた浄土庭園としての空間を構成していた。

窟に設けられた毘沙門堂は、12世紀以降、何度かの火災に遭いながらも再建を繰り返し、別当西光寺の管理の下に現在まで存続している。江戸時代以降の境内の様相については、現在に残る文書や絵図・木版画等によって知ることができる。毘沙門堂の西方には、凝灰岩の岩壁に刻まれた大きな磨崖仏があり、現在もなお人々の厚い信仰を集めている。

7 白鳥館遺跡

北上川交通の要衝に位置し、安倍頼時の八男である白鳥八郎行任（または則任）の居城跡と伝えられる遺跡である。白鳥館遺跡は、11世紀後期の日本の北方領域において、奥州藤原氏に先行して権力を振るった安倍氏に関連する遺跡としての伝承を持ち、12世紀に政治・行政上の拠点として平泉が形成される以前の周辺地域の歴史的背景を物語る重要な構成資産である。

白鳥館遺跡は、平泉の中心部から北に約5kmの位置にあり、北上川と白鳥川との合流点付近において、北上川に向かって半島状に突き出た丘陵（標高24～42m）上に位置する。北上川の水面との比高は最大22mを測り、天然の要害を成す。現況地形の判読や発掘調査の結果によると、白鳥館遺跡の内部は堀と切岸によって3つの郭に区画され、中央部に位置する二の丸には土塁が構築されているほか、それぞれの郭は腰郭状の小さな区画によって囲まれていることが明らかとなっている。このような現状の地形において明確に確認できる堀・切岸・郭などの遺構は、15世紀頃に構築された城館の遺構と推定される。それらの下層には12世紀の遺物包含層が確認されており、出土遺物をも含めて総合的に判断すると、白鳥館遺跡は10世紀～16世紀までの期間に断続的に使用されていたことが明らかである。

日本古代の律令制の施行細則を集成した『延喜式』によれば、この地域に古代交通制度に基づく「白鳥駅」の存在したことが知られる。また、18世紀の地誌類には、「白鳥館」に関する記録として、11世紀には安倍氏の居城であったことや、16世紀には白鳥氏の居城であったことなども記されている。

白鳥の地域は10世紀から奥州を南北に往来する主要道の通過点に当たり、白鳥館遺跡は11世紀以降に北上川交通を抑える経済・軍事上の拠点として重要な機能を持っていたものと考えられる。

8 長者ヶ原廃寺跡

平泉の北を流れる衣川から北へ約1kmの平坦な水田地帯に立地する寺跡である。「奥六郡」と呼ばれた日本の北方領域が安倍氏の支配下にあった時代には、奥六郡の南端境界に当たる衣川の流域には衣河関などの重要な施設が置かれた。長者ヶ原廃寺跡は、衣川の北岸流域に造営された寺院の跡と見られ、12世紀に平泉に政治・行政上の拠点が形成される歴史的背景と衣川地域の重要性を示している。

発掘調査の結果、築地堀跡又は土塁跡に囲まれた一辺約 100mの方形の区画を成し、その中に本堂跡・西建物跡・南門跡から成る礎石建物跡が存在することが判明した。本堂跡の規模は 5 × 5 間 (16.9m × 16.9m)、西建物跡の規模は 3 × 3 間 (7.36m × 7.14m) である。現地形に残る築地又は土塁の高さは約 0.8m で、その外側には最大幅約 2.5m、最深約 0.4m の堀が廻らされている。12 世紀の出土遺物はなく、造営年代は 10 世紀末～11 世紀前半と推定されている。

現在、寺跡の区画の内側には、現地形に基づき造成された小区画の水田から成る農地に囲まれて建物跡の基壇と礎石が遺存し、その地下には寺院跡に関連する遺構が良好に残されている。

9 骨寺村荘園遺跡と農村景観

骨寺村荘園遺跡と農村景観は、平泉の中心部から西約 12 km 付近の磐井川沿いに位置する。中尊寺経蔵別当領であった骨寺村荘園遺跡は、現存する絵図や文書により、日本の中世における荘園の様相を現地において照合できる稀有な事例であり、政治・行政上の拠点であった平泉の周辺地域における土地利用の様相を示す重要な構成資産である。かつて骨寺村と呼称された本寺地区の農村景観は、仏教色あふれる日本の農村の原風景と、そこで営まれた中世の人々の精神世界を現在に伝えている。

1117 から 1125 年にわたる 8 年間の歳月を費やして經典 5,000 余巻から成る「紺紙金銀字交書一切経」の書写を統括した自在房蓮光は、1126 年に私領骨寺村を中尊寺経蔵に寄進し、清衡から初代の経蔵別当に補任された。「紺紙金銀字交書一切経」(国宝)は、清衡の発願により書写され、中尊寺経蔵に納められた經典である。史料によれば、骨寺村は 15 世紀の前半まで中尊寺経蔵の別当領として知行されたことが確認される。

骨寺村の様相は、中尊寺に伝わる 2 枚の「陸奥国骨寺村絵図」(重要文化財)に描かれている。絵図は、寺領の境界に関して発生した相論を解決するために 14 世紀に描かれたものと考えられている。描写の内容から「詳細絵図」と「簡略絵図」に分類されており、いずれも栗駒山を正面に東から西を俯瞰して描写されている。絵図に描写される範囲は、骨寺村の「四至」として「東鑑懸、西山王窟、南岩井河、北峯山堂馬坂」とする史料(『吾妻鏡』)の記述と一致する。

絵図に描かれた荘園の四至を示す地名をはじめ、要所に現存する山王窟・白山社・不動窟などの天台信仰に関する宗教関連施設、絵図に描かれた中尊寺へと通ずる道として開設された「馬坂新道」、村の出入りに設定された慈恵塚の存在などから、先に述べた蓮光自身又は蓮光に率いられた天台聖らによって骨寺村の開発が計画されたことが推測できる。

近世以降の本寺地区は平泉とともに仙台藩領に属するが、山間にある本寺地区は近代以降、現代に至るまで大規模な開発が行われてこなかった。そのため、本寺地区においては、中世以来の土地利用の形態が大きく変わることなく、自然的条件に適応しつつ、時代に応じて技術や工夫を加えながら農村の暮らしを緩やかに発展させ、地域の特色をよく表す文化的景観が形成された。

9 - 1 骨寺村荘園遺跡

骨寺村荘園遺跡は、栗駒山から東流する磐井川中流域の山間に立地する。遺跡は、東西約 6 km、南北約 2 km の範囲に分布する。荘園遺跡の中心部である磐井川左岸の平野部は、東西約 3 km、南北約 1 km、標高約 140～180m で、西から東に向かって緩やかに傾斜している。

現在、荘園遺跡を構成する宗教関連施設を中心として、西から東に向かって、山王窟、白山社・駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚・大

師堂の9箇所が史跡に指定されている。これらの史跡に指定されている箇所は、絵図に描かれ荘園に起源を持つと考えられるもの、発掘調査の成果から荘園に起源を持つと考えられるもの、15～16世紀と考えられるものの3つに大別される。

絵図に描かれているものには、山王窟・白山社・伝ミタケ堂跡・若神子社・不動窟・慈恵塚・大師堂がある。平野部から約3km西方の磐井川に面する岩壁の中腹には、荘園の西の境界を成す山王窟（山王石屋）がある。「六所宮」があったとされる平野部西側の小高い丘（平泉野台地）には白山社が鎮座し、その麓には駒形根神社がある。盆地の北側に連なる丘陵の西側には、金峯山又は「ミタケ堂」跡と伝えられる岩場、約1.5km離れた丘陵の東側には不動窟、慈恵大師を祀った慈恵塚があり、その麓には拝殿の大師堂がある。盆地中央東側の水田内には、若神子社の林がある。

発掘調査の結果、盆地北東隅に位置する梅木田遺跡では、12世紀～14世紀に属する掘立柱建物跡などの遺構が発見されており、梅木田遺跡の東700mにある遠西遺跡では、12～13世紀のかわらけの破片や常滑焼の破片などの遺物が発見されている。これらの遺構・遺物は、絵図にも描かれているように、荘園内に屋敷が分布していたことを想定させるものである。さらに、東西に連なる北側の丘陵の中程には、15～16世紀の山城跡と伝えられる要害館跡がある。

9-2 一関本寺の農村景観

栗駒山（標高1,627m）の東麓に水源を発する磐井川の流域には、河岸段丘から成るいくつかの小盆地が連続し、豊かな農村地帯が展開している。そのうちのひとつが一関本寺の地域で、特に中世平泉の中尊寺経蔵別当領に關係する荘園遺跡の諸要素が良好に遺存することで知られる。同時に、冷涼な気候や水がかりに難のある地形など自然的条件に適応しつつ、近世・近代を通じて稲作等の農林業を継続的に営むことにより緩やかな発展を遂げ、地域の風土とも調和して形成された特色のある農村の文化的景観である。

一関本寺は古く骨寺村と呼ばれ、中世における中尊寺経蔵領の荘園として米・材木・漆・油などの生産が行われた場所である。鎌倉時代から南北朝時代にかけての時期（14世紀）の制作とされる『陸奥国骨寺村絵図』には、栗駒山を背景として、東の鑑懸、西の山王窟、南の岩井河、北の峯山堂・馬坂など『吾妻鏡』にも記す骨寺村の四至をはじめ、本寺川沿いの平地に水田と家屋が孤立分散する当時の骨寺村の景観が描かれており、現状に見る土地利用の原形を窺い知ることができる。

17世紀末期以降は仙台藩の所領となり、1715年に用水路が開削されたのをはじめ、北側丘陵地帯の谷部にため池の造成が進むなど、灌漑水系が整備されたことにより、河岸段丘上の広い範囲に農耕地が拡大した。比較的小規模で不整形な区画から成る水田の区域が残されているほか、微地形に従い湾曲して巡らされた用水系統にも自然環境に対応しつつ形成された伝統的な農耕地の姿が窺える。

本寺では、河岸段丘上の本寺川や山裾の湧水など比較的冷たい水を水稻栽培に適した水温とするために、畦畔越しに行う給水など水循環に関する各種の工夫が見られる。ひとまとまりの水田について1戸の農家が系統的に水管理を行うことにより農地経営上の大きな利点が得られたことから、一団の水田ごとに各農家が孤立分散して屋敷地を構える独特の散村形式の居住形態が歴史的に展開したものと考えられる。現在においても水田地帯の中に散居として展開する各農家には、北西の強い季節風から家屋を護るために「イグネ」と呼ぶ屋敷林が巡らされ、その内側に主屋を

中心として馬屋・土蔵・作業小屋などの付属屋から成る建物の配置構成を取るなど、近世から近代にかけて完成した岩手県南地方の居住形態の特質が確認できる。

この地域では古くから稲作を主体とする農業が進んだが、居住地の周辺では自給のために畑作物の栽培も行われてきた。また、丘陵地帯を覆う樹林地は、かつて燃料、建築用材、生活道具の製作資材等の調達の間であったが、現在では広く山菜・キノコ等の採集の間として利用されている。

以上のように、「一関本寺の農村景観」は、中世の『陸奥国骨寺村絵図』に描かれた当時の土地利用との照合が可能な希有の事例であるのみならず、この地における自然的条件に適応しつつ、近世から近代にかけて緩やかな発展を遂げたこの地方に独特の農耕・居住の在り方を小規模ながら簡潔かつ十分に示す文化的景観である。

歴史

1 資産の歴史

1) 平泉文化の萌芽：8～9世紀

8世紀末期から9世紀にかけての時代は、奈良から京都に都が遷され、中国の唐の政治制度と文化を模範として、律令制に基づく中央集権国家を確立しようとした時代である。この頃、日本の北方領域であった陸奥国とそのさらに北側（北奥）の地域は、蝦夷と呼ばれる人々が住み、中央政府の直接支配の及ばない辺境の地とされていた。しかし、京都に都が遷された頃から蝦夷征討が開始され、征夷大將軍に任じられた坂上田村麻呂は802年に胆沢城を造営し、衣川以北における中央政府の版図を拡大した。達谷窟に存在する毘沙門堂及び達谷西光寺は、この頃に達谷窟を要塞として使っていた悪路王等を坂上田村麻呂が征討した後に創建・開山したものと伝えられている。こうして、辺境の地においても、胆沢城の造営を契機として北上川の流域を中心に寺院が造営され、仏教が奨励されていった。

2) 平泉文化の胎動：10～11世紀後半

10世紀から11世紀後半は、律令国家体制から王朝国家体制への転換期に当たる時代である。11世紀の陸奥・出羽の地方では、在地勢力であった安倍氏・清原氏が台頭し、衣川以北の地に勢力を拡大していた。衣川の北岸の地域には、この時期における安倍氏の拠点が存在したとする多くの伝承が残されている。特に、衣川の北岸の地域に位置する白鳥館遺跡と長者ヶ原廃寺跡は、奥州藤原氏によって平泉に政治・行政上の拠点が形成される歴史的背景を示す重要な遺跡である。

1051～1062年に起こった前九年合戦では奥六郡を基盤とする安倍氏が、1083～1087年に起こった後三年合戦では山北三郡を基盤としていた清原氏が、それぞれ中央からこの地に陸奥守として派遣された源氏によって滅ぼされた。その後、安倍氏と清原氏の系譜を継ぐ藤原清衡が、陸奥国及び出羽国の押領使として奥六郡及び山北三郡を手中に治めた。これを出発点として、それ以後の歴代の奥州藤原氏が押領使・鎮守府將軍・陸奥守に就任することとなり、京都の中央政権と一定の距離を保ちつつ奥州における政治・行政上の拠点を築き、独自の文化が形成されることとなった。

安倍氏の時代に奥六郡の南の境界を成した衣川の北岸には長者ヶ原廃寺跡が遺存するのをはじめ、北上川流域にはその他の寺院跡が分布する。また、後代に建立された現存の寺院にも10～11世紀のものと思われる多くの仏像が安置されているほか、当時の集落遺跡においても仏教に関連

する多くの遺構・遺物が確認されている。このような事実からは、辺境の地における造寺・造仏などの仏教文化の形成が安倍氏の時代にすでに始まっていたことがうかがえ、続く平泉文化において浄土思想の隆盛を招来する母胎ともなったことを示している。

3) 平泉文化の隆盛：11世紀末～12世紀

11世紀末期から12世紀にかけては、浄土思想が隆盛した時代であった。釈迦の入滅後、一定の時間が経過して仏法が衰え、末法の世に入ったとされる1053年には、関白藤原頼通が京都の南方に当たる宇治の地に、西方極楽浄土を再現して平等院を造営した。一方、11世紀後半の陸奥国では戦乱が繰り返し続いていた。そのような戦乱を生き抜いた経験が、藤原清衡をして仏教的理念に基づいた国づくりに邁進させ、結果的に浄土思想を基調とした政治・行政上の拠点を完成させることとなった。

〔清衡の時代：～1128〕11世紀末～12世紀初頭に、清衡（後の奥州藤原氏初代）は江刺郡に存在した豊田館を出て磐井郡平泉に館を移したと伝えられる。当時の平泉は、奥六郡の南の境界線である衣川を超えて、さらに南の地点に位置する。東稲山をはじめ東方に展開する北上山地と、西方に展開する奥羽山脈との間に挟まれた狭隘な盆地に当たり、日本の北方領域における主要道が北上川と近接して南北に貫く交通の要衝を成していた。東に北上川、北に衣川、南に太田川がそれぞれ流れ、三方を川に挟まれた河岸段丘には猫間が淵と鈴沢の池から成る細長い二本の低湿地が入り組み、随所に湧水が点在する独特の水辺の景観を形成していた。平泉の北郊に当たり、東西から丘陵が迫る狭窄部を北上川が流れる要衝には白鳥館遺跡が位置し、平泉の西郊に当たり、地形的な制約により道が大きく屈曲する交通の要衝には達谷窟が位置する。

衣川北岸の豊田館から平泉に移った清衡は、衣川の渡河点として要衝の地を成した関山に中尊寺一山を造営した。古文書によると、1105年に多宝寺を建立し、各建造物に残る棟木銘又は棟札によると、1122年に中尊寺経蔵、1124年に中尊寺金色堂をそれぞれ建立したことが判明している。また、中尊寺の伝承によると、1107年に大長寿院（二階大堂）を建立したとされている。清衡は、1126年に鎮護国家大伽藍一区と称する伽藍主要部の落慶供養を行ったが（「供養願文」）、その2年後に当たる1128年に死去し、その遺体は中尊寺金色堂に葬られた。

中尊寺の造営は、平泉が政治的にも文化的にも奥州の中心であることを決定づける意義を持った。それ以後、基衡・秀衡・泰衡を含め奥州藤原氏は、約100年間にわたり奥州の産金をもとに蓄積した莫大な富を背景として、日本の北方世界における政治・行政上の拠点としての平泉を発展的に形成していった。清衡は僧1人に砂金1両、1,000人に1千両を出費し、千僧供の盛大な行事を催した。『吾妻鏡』によると、清衡は、延暦寺・東大寺をはじめ日本の諸大寺から震旦（中国）の天台山に至るまで、寺ごとに1,000人の僧侶を招いて千僧供を開催したとされている。

1117～1125年にかけて「紺紙金銀字交書一切経」（国宝）の写経を総括した自在房蓮光は、私領であった骨寺村を中尊寺経蔵に寄進し、1126年に中尊寺経蔵初代別当に補任された。それ以後、骨寺村は1435年まで経蔵別当領として伝領された。現在、中尊寺に残る2枚の「陸奥国骨寺村絵図」（重要文化財）は、鎌倉時代における骨寺村の様相を知ることができる貴重な史料である。

〔基衡の時代：～1157年頃〕二代基衡は、毛越寺を造営した。金堂円隆寺とその前面の庭園などから成る毛越寺は、丘陵上に位置する中尊寺とは異なって平地に造営された伽藍で、北に位置

する金鶏山の山頂から延びる南北線を基準としていた。基衡は 1157 年頃に死去し、その遺体は中尊寺金色堂に葬られた。基衡の死後、その妻は毛越寺の東隣に存在した自らの住居を寺に改め、観自在王院とした。その庭園は、旧観自在王院庭園として現在に遺存する。基衡の時期には、毛越寺から観自在王院を中心とする区域を対象として、東西方向に約 30m と 120m の寸法に基づく道路及び敷地の計画地割が敷かれた。この計画地割は法勝寺などの寺院群が造営された京都の白河地区に倣ったものと考えられ、観自在王院に南面して東西大路などの幹線道路が整備されるとともに、街路沿いには牛車を格納する車宿や宝物庫である高屋群などが設けられた。さらに、平泉の四方には、政治・行政上の拠点と周辺地域との境界を象徴する施設として、それぞれ鎮守社が設けられた。奥州において産金が豊かであったこの時期には、二代基衡が金堂円隆寺の本尊の造仏に対する謝礼として、船で砂金を京都に運んだという記録（『吾妻鏡』）が残されており、奥州藤原氏が北上川の舟運を重視していたことを示している。

〔秀衡の時代：～1187〕三代秀衡の時期には、北上川に近い平泉の東域に当たる区域に、政治・行政上の拠点施設として「平泉館」（政庁）が造営された。その遺跡は、北上川沿いに柳之御所遺跡として遺存する。その東及び南に接して、西方極楽浄土を再現した寺院である無量光院や、居住の場である加羅御所などが造営され、まさに政治・宗教・生活が一体化した空間が設けられた。

政庁である「平泉館」は清衡・基衡の遺体（ミイラ）を納めた中尊寺金色堂の正面方向に位置し、奥州藤原氏の先祖に対する強烈な崇拝精神に基づく東西方向の軸線を形成していた。柳之御所遺跡の最盛期に当たる 12 世紀後半には、柳之御所遺跡が北上川に面する部分に湊が開かれ、舟運による物資の運搬が行われていたことが想定されている。

柳之御所の西に建立された無量光院は、さらにその西方に位置する金鶏山を背景として、極楽浄土の世界を具現化するために宇治平等院の伽藍配置と空間構成を発展・継承したものとされている。また、『吾妻鑑』によると、無量光院の東方には、秀衡の日常的な居住空間である加羅御所が造営された。このように、政治・行政上の拠点的施設である政庁、西方極楽浄土を再現した寺院、居住空間である御所がそれぞれ東西に並ぶことにより、浄土思想を基調とする精神的な軸線が形成された。1169 年には中尊寺に釈尊院五輪塔が造立され、「平泉型宝塔」とも呼ばれる願成就院宝塔も造立された。1170 年に鎮守府将軍に任じられ、1181 年には陸奥守を拝命して全盛を極めた三代秀衡は 1187 年に死去し、その遺体は中尊寺金色堂に葬られた。

この頃、平泉を訪れた流浪の歌人西行は、「ききもせず たはしね山の桜花 吉野の外に かかるべしとは」（『山家集』）と詠んだ。奈良の吉野山に多くのサクラを植えた京都貴族の観桜文化にも触発され、北上川の対岸に秀麗な山容を見せる束稲山にサクラが植樹されたものと考えられる。西行の和歌は、政治・行政上の拠点としての平泉の環境整備が、周囲の自然環境にも十分配慮しつつ進められたことを伝えている。

〔藤原氏の滅亡：1189〕鎌倉幕府を開いた源頼朝の弟である源義経は兄の追討を逃れ、1187 年に平泉の藤原秀衡のもとに身を寄せたが、1189 年に頼朝の力を恐れた四代泰衡により襲われ自害した。その後、鎌倉の源頼朝は奥州に攻め入って、奥州藤原氏を滅ぼした。四代泰衡は、平泉館に火を放って逃れた。この文治五年奥州合戦（1189 年）を以て、平泉は日本の北方領域における政治・行政上の拠点としての機能を終えた。往時の平泉の様相を今日に伝える貴重な文献史料「寺塔已下注文」（『吾妻鏡』）は、源頼朝が平泉を攻略した直後に中尊寺・毛越寺の僧によって注

進されたものである。この時期、政治・行政上の拠点としての平泉の範囲は、衣川流域の北岸にも広がりを見せていたようである。平泉の西の結界を成す達谷窟には、源頼朝が文治五年奥州合戦の凱旋の帰路に立ち寄っている。

4) 鎌倉幕府による保護：13世紀以降

1192～1334年までの時代は、武士が政権を掌握し、鎌倉に幕府（武士による本格的な政権）が置かれた時代である。奥州藤原氏が滅亡したことにより、強力な庇護を無くした平泉の寺院は、鎌倉幕府の保護・統制を受けることとなった。1226年に毛越寺（円隆寺・嘉勝寺）が焼失し、1337年には中尊寺の諸堂が焼失したが、金色堂と経蔵の一部が災禍を免れた。このように、12世紀に隆盛を誇った平泉の寺院も次第にその姿を変えたが、残された建築物については手厚い保護措置が採られた。奥州藤原氏が滅亡した年（1189年）の100年後に当たる1288年には、鎌倉幕府が奥州藤原氏に対する供養の意味が込めて中尊寺金色堂の覆屋を建造した。現存する覆堂は、室町時代中期に再建されたものである。1304年には、中尊寺経蔵の修理が行われた。また、鎌倉幕府が滅亡した直後に当たる1337年には、金色堂・経蔵を除いて中尊寺の多くの寺塔が焼失した。

5) 霊場としての保護と『義経記』の創作：14世紀以降

14世紀～16世紀にかけての時代は、南北朝の内乱を経て室町幕府が開かれた時代である。この時期における平泉の諸寺では、葛西氏などの有力な封建領主による庇護を頼みとする一方で、多くの参拝者が霊場としての平泉を訪れたことにより、寺院の維持が図られていた。今日に伝えられる巡礼札や「平泉諸寺参詣曼荼羅」などは、中尊寺・毛越寺・西光寺などの平泉の諸寺が参詣の霊場であったことを示している。1573年には、葛西氏と今一人の封建領主である大崎氏との間に起きた争いにより、毛越寺南大門及び観自在王院が焼失した。

また、平泉に深く関わった人物である源義経は、室町時代に製作された文学作品である『義経記』をはじめ、多くの文芸・芸能・芸術、伝承などの題材として取り上げられることになった。義経の伝説が、その後の日本人の精神文化に与えた影響は大きい。

6) 仙台藩による保護と文人墨客による平泉文化の表現：17世紀以降

1603年に江戸に幕府が開かれ、諸大名は藩権力による支配を行うようになった。平泉は仙台藩の庇護下に入り、1618年に仙台藩主伊達政宗が平泉を巡検して諸寺の寺領を安堵した。1689年に、仙台藩は遺跡保存のために寺院の仏堂の礎石や庭園の庭石を持ち出すことを禁止し、遺跡の周囲に杉並木を植栽した。中尊寺の参道である月見坂が整備されたのもこの頃である。1849年に焼失した中尊寺の白山神社能舞台は、1853年に仙台藩によって再建された。

17世紀前半から19世紀の半ばにかけては、多くの文人墨客が平泉を訪れた。1689年には俳人松尾芭蕉が旅に出て平泉を訪れ、平泉の盛衰を「三代の栄耀一睡の中にして、…」とその感慨を記した。また、『おくのほそ道』に収載する「夏草や 兵どもが 夢の跡」、「五月雨の 降りのかしてや 光堂（中尊寺金色堂）」（『おくのほそ道』）などの俳句には、多くの建築物が失われ廃墟と化した遺跡の状況をはじめ、唯一の建築物としてかつての平泉文化を彷彿とさせる金色堂など、現在にも連なる平泉の様相が描写されている。1786年には、旅行家の菅江真澄が東北地方の各地を巡遊する途上で平泉を訪れており、「かすむ駒形」（『真澄遊覧記』）を記した。このような後代の文人墨客による文化的活動もまた、平泉の旧跡を今日に伝える大きな役割を果たしてきた。

7) 国や地方自治体による文化財保護：19世紀後半以降

1867年に江戸幕府が大政奉還を行い、翌年に明治政府が誕生して近代国家への道を歩みはじめた。1869年には版籍奉還が行われ、平泉に対する仙台藩の支配はなくなった。さらに、1876年には明治天皇巡幸の際に中尊寺・毛越寺の巡覧があり、これを契機として岩手県は1877年に「宝物保存規則書」を作成し、中尊寺・毛越寺の保存事業に着手した。

一方、1897年には「古社寺保存法」が制定され、1929年に「国宝保存法」に改められた後は、社寺の建造物や宝物のみならず、国・地方公共団体・個人の所有する文化財へと保護の対象が拡大された。さらに1919年には「史蹟名勝天然記念物保存法」が制定され、名所旧跡のみならず、天然記念物についても保護の対象とすることとされた。中尊寺金色堂や毛越寺・無量光院跡については、それらの歴史的・文化的な重要性に鑑み、史蹟名勝天然記念物保存法の制定当初から国家的保護の対象とされた。

一方、長い伝統をもつ宗教的な儀式や祭礼は、多くの人々の信仰心や努力によって受け継がれ、廃仏毀釈などの存続が危ぶまれた一時期を乗り越えて、今日まで確実に伝えられてきた。

1945年の第二次世界大戦の敗戦以後は、日本が民主主義的国家として発展した時代である。1950年に「国宝保存法」と「史蹟名勝天然記念物保存法」を統合して、新たに「文化財保護法」が制定された。それ以来、構成資産はすべて国の文化財として指定され、今日まで保護されてきている。このような法的な保護措置に加え、資産を構成する寺院では宗教活動が活発に行われ、祭礼などの伝統的な行事も盛大に行われており、平泉は今日なお多くの参拝者や観光客を惹きつけている。

2 国外において果たした役割

1) 広く国内外に影響を与えた奥州の金

日本の正史である『続日本紀』によると、749年に、日本で最初に金を産出したのは陸奥国であり、さらに藤原実資の日記『小右記』によると、982年には奥州以外の地からは金が産出しないと記されている。

奥州藤原氏の初代清衡は、僧1人に砂金1両、1,000人に計1千両を支出して、盛大な千僧供の行事を催した。『吾妻鏡』によると、延暦寺・東大寺などの日本の諸大寺から震旦(中国)の天台山に至るまで、各寺ごとに千僧供を開催したとされ、奥州の産金を背景とする奥州藤原氏の莫大な財力を物語っている。1153年に二代基衡と中央の貴族との間で行われた年貢増徴に関する交渉の過程を示す藤原頼長の日記『台記』によると、陸奥国高鞍庄と本吉庄から摂関家に上納される年貢は砂金によって行われていたことが知られる。これらの記録からは、奥州の産金が豊富であったことがうかがえ、馬とともに金が当時の中央政府に対する奥州藤原氏の貢納物として有名であったことがわかる。北上山地の中でも、現在の岩手県南部から宮城県北部にかけての地域は、12世紀の主要な産金地であったものと考えられる。特に岩手県の気仙地区には、長い間、産金地であったことを示す金山の痕跡や伝承が現在も残されている。

11世紀中頃～12世紀には、日宋貿易の交易品として金が大量に中国に運ばれた。14世紀に編纂された中国の歴史書『宋史』の中でも、同時代の日本の状況を伝える「日本伝」には、対馬の銀と並んで奥州の金が記されている。平泉の絢爛たる黄金文化が形成される経済的基盤となったのは奥州の産金であり、その品質の高さと豊富な産出量は広く国内外で知れわたっていたのである。

2) 東アジア東端における文化的交流の発着点

奥州藤原氏は、広く国内外に知られた奥州の産金を経済力の基盤として、北東アジアから東南アジアに及ぶ広範な交易を展開し、京都の文化を受容しつつ在地の文化を混交させ、平泉に独自の文化を形成した。明州（寧波）から博多経由で平泉に持ち込まれた白磁、東海地方で生産された渥美・常滑の壺甕類、能登産の珠洲の壺甕類、京都から取り入れられたかわらけ、北方の海域からもたらされた鷲羽やアザラシの皮、奥六郡のさらに北方に展開する社会との繋がりを示す内耳鉄鍋などは、地域を越えて広範囲にわたる交易活動が展開していたことを物語っている。中尊寺金色堂の建築や装飾に用いられた東南アジア産の紫檀・赤木、南海産の夜光貝などの材料も、広範囲にわたる交流の結果を示唆している。これらの文物や特産品は、東西の文化交流に大きな役割を果たした陸の道（シルク＝ロード）や海の道（セラミック＝ロード）を通じて平泉に伝えられたものであった。

3) 仏教伝播の東の終着点に造られた仏教美術の粋を極めて具現化された浄土の世界

紀元前6～5世紀にインドで生まれた仏教は、紀元後6世紀に大陸から日本に伝来し、7世紀には国家を鎮護する宗教となった。日本に伝来した仏教は9～10世紀にますます盛んとなり、在来の神道（自然神崇拜）とも融合して日本固有の「神仏習合」を生み出し、日本独自の文化的土壌を育てていった。10～11世紀頃には、仏法が衰え、世も末になるという「末法思想」の下に、死後に阿弥陀仏の居所たる西方極楽浄土への往生を願う浄土思想が広がった。

このような思想的背景の下に、平泉において成熟した仏教文化は、浄土世界を具現化した建築や庭園のみならず、それらを取り巻く周辺の自然環境とも一体となって、浄土思想に関連する独特の文化的景観を形成した。その中でも特に一群の浄土庭園は、中国敦煌の莫高窟の壁画で知られる「阿弥陀浄土变相図」を模範として、日本的な自然観を足がかりとしつつ日本的な浄土空間を具現化した芸術作品の傑作であり、それらの世界史的な価値は極めて高い。

さらに、南宋から輸入されたと伝えられる宋版一切経、平泉で書写された中尊寺経をはじめとする経典、五台山から伝えられた騎師文殊菩薩像などの仏像は、仏教伝播の東の終着点である日本の平泉において、12世紀に成熟した仏教文化の水準の高さを示している。

4) 黄金の島「チパング」伝説誕生と大航海時代をもたらした遠因

大陸に大量に持ち込まれた奥州の産金は、イタリアの商人であるマルコ＝ポーロの旅行見聞を13世紀にまとめた著名な『東方見聞録』には、日本のことを黄金の島「チパング島」と記し、日本が産金国であるとの伝説を生み出した。『東方見聞録』に記された「この国ではいたる所に黄金が見つかる」との記事は、日宋貿易が行われた11世紀以降、豊富な産金国としての日本が広く大陸にも知れわたっていたことを示している。さらに、産金地の印象を一層高めたのは、同じく『東方見聞録』に記す「国王の一大宮殿は、それこそ純金づくめで出来ている」との記事で、日本の産金地奥州に存在した中尊寺金色堂に端を発したものと考えられている。

ヨーロッパでは、マルコ＝ポーロの『東方見聞録』に刺激されて、アジアの金や香辛料などに対する関心が高まった。そして、1492～1493年に「インド」に向かって大西洋を横断したコロンブスはサンサルバドル島に到着し、さらに今日のアメリカ大陸を発見した。『東方見聞録』に記された「チパング」伝説は、15世紀末以降、スペイン・ポルトガル両国を中心とするヨーロッパ諸国が、新たな土地と富を求めて世界的な航海活動を展開したいわゆる「大航海時代」を誘発する遠因とも

なった。16世紀には、日本にもヨーロッパの貿易船が訪れるようになった。

このように、奥州の産金は東アジア世界の中の日本がヨーロッパに紹介され、広く世界の中の日本として認識されていく重要な契機を作り出したといえる。

3 国内において果たした役割

1) 地方の時代の始まりと奥州の統一

京都を中心としていた9～12世紀の日本においては、白河関以北の北方領域（ほぼ現在の東北地方に当たる）は東山道の奥地として「道の奥」（陸奥国）と呼ばれ、蝦夷が住む辺境の地であった。しかし、中央政権の直接支配が及ぶ範囲は次第に北上し、724年に多賀城に国府が設置されたのをはじめ、802年には胆沢城に鎮守府が置かれた。衣川以南の地は多賀国府の管轄下に置かれ、衣川以北の地は胆沢鎮守府の管轄下に置かれた。特に衣川以北の地は「奥六郡」と呼ばれた。

前九年合戦・後三年合戦の後、奥六郡の支配者であった安倍氏・清原氏の継承者として、奥州藤原氏初代清衡は江刺郡豊田館から衣川を南に越えて平泉へと館を移した。平泉に館を移した清衡は、白河関（北緯37度）から外が濱（北緯41度）に至る幹線道路として奥大道を整備し、1町（108m）ごとに笠卒塔婆を立てて距離を明示したほか、20日余の日数を要する全行程のほぼ中心に当たる関山に中尊寺（多宝寺）（北緯39度）を建立したとされる。このようにして始められた清衡の国づくりは、京都一極集中の時代から地方の時代への転換を告げる画期的な役割を果たすこととなった。

奥州藤原氏の初代清衡は、中尊寺における「鎮護国家大伽藍一区」の落慶に当たり、「供養願文」を読み上げたとされる。願文は、奥州での度重なる戦乱を省みて、亡くなったものすべての霊を敵味方の区別なく浄土の世界へ導くことを願って起草されたのであった。奥州藤原氏は、11世紀末～12世紀の約100年の間に、浄土思想に基づき平泉に寺院や政庁を造営し、政治・行政上の拠点を完成していった。

2) 日本独自の武士の政権による中世都市の先駆け

古代日本の平安京・平城京などにおいては、中国の都城を模範として、南北の朱雀大路を中軸に方格地割を基本とする都市計画が採用された。これに対して平泉では、浄土思想に基づき、自然地形を存分に活かしつつ、寺院、武士の霊廟、政庁などを密接に関連させて配置することにより、周囲の自然環境とも一体となった独特の政治・行政上の拠点が完成された。こうして、平泉は鎌倉など日本の中世都市の先駆けとなり、さらに江戸・仙台などの近世城下町を生む母胎ともなった。12世紀の日本の北方領域における政治・行政上の拠点である平泉は、古代の都城をも含め、日本の都市的集住空間が古代中国都市の影響から脱皮して、日本独自の都市へと発展を遂げる重要な移行段階を示している。

源頼朝は、平泉中尊寺の二階大堂（大長寿院）を模して、鎌倉に二階堂（永福寺）を建立したとされる。源頼朝は、奥州藤原氏が平泉に造り上げた文化を継承して、鎌倉に武士の都と幕府の体制を整えようとしたわけである。

3) 日本国の領域の北方への拡大

日本の古代国家において、陸奥国のさらに北側（北奥）の地域（現在の東北地方の北緯40度以北）は、中央政権の直接支配が及ばない蝦夷の地と認識されていた。しかし、12世紀には白河関

から外が濱に至る区域が奥州藤原氏の政権下に入り、本州北端まで日本国の領域が拡大された。

同時に、奥州藤原氏政権の成立は、津軽海峡を挟んで北に位置する北海道島の社会を変容させる大きな要因となった。

4) 漆芸・金工の粋を極めた浄土教建築の阿弥陀堂

日本の建築史上、11世紀～12世紀は、西方極楽浄土への往生を願う浄土思想の流行に伴い、全国各地に阿弥陀堂が建立された時期である。平泉の中尊寺金色堂は、皆金色の装飾に蒔絵・螺鈿の漆芸・金工の技法を駆使した3間四方・宝形造の形式を持つ阿弥陀堂としてその芸術的完成度が高く、国内に現存する数少ない同形式の木造建築の中でも創建年代が確実に把握できる最古のものである。当初、金色堂には初代清衡の遺体が納められたが、基衡・秀衡の死に伴って須弥壇が増設され、順次遺体が葬られた。このことにより、金色堂は西方極楽浄土を再現した阿弥陀堂であるのみならず、奥州藤原氏歴代の霊廟としての性質をも併せもつこととなり、浄土思想に日本古来の祖先崇拜の思想が混交した独自の建築理念を持つこととなった。現在の宮城県角田市には藤原秀衡夫妻の発願により建立されたと伝えられる重要文化財高蔵寺阿弥陀堂が存在するほか、福島県いわき市には藤原基衡の娘徳姫が建立したと伝えられる国宝白水阿弥陀堂が現存する。いずれも平泉の金色堂を規範として建立されたことは明白であり、平泉文化が現在の東北地方一円に浸透していたことを示している。

5) 日本庭園の重要な段階を示す浄土庭園群

日本庭園史上における11世紀～12世紀は、それまでの寝殿造住宅庭園の様式をもとに浄土庭園が発展的に形成された時期であり、後代における日本庭園の基本的な構成要素が出揃う重要な時期である。1053年に宇治に造営された平等院鳳凰堂は、平泉において西方極楽浄土の世界を具現化した空間芸術として、さらに独自の発展を遂げた。初代清衡による中尊寺、二代基衡による毛越寺、三代秀衡による無量光院と仏教的理念に基づく寺院が次々と造営され、様々な浄土の世界を具現化することによって造園の意匠・技術を発展させた。中尊寺の大池跡、毛越寺の大泉ヶ池、旧観自在王院の舞鶴が池、無量光院跡の梵字が池、達谷窟の蝦蟇が池など、平泉の庭園群は12世紀の約100年間に浄土庭園が独自に発展した過程を表すとともに、それらの事例の中に最高の発展形態を含む点で比類のない顕著な価値を示しているといつてよい。

6) 日本独自の武士文化への影響

国内外にわたる交易の発着点であった平泉には、博多経由で明州（寧波）から白磁などの陶磁器に象徴される唐物が数多くもたらされた。唐物は、奥州藤原氏の権威を象徴する威信財として珍重された。さらに「唐物好み」は鎌倉幕府によって継承され、茶道など日本の武士文化の形成に寄与した。

平泉で形成された独自の文化は、文化の担い手が貴族から武士へと移行する過程で、今日に連なる日本的文化の源が形成される契機をもたらした。

7) 芸術・文学等に与えた影響

12世紀に平泉を訪れた西行は、束稲山や衣川の風景を和歌に詠んだ（『山家集』）。17世紀の俳人である松尾芭蕉は、『おくのほそ道』において1189年の奥州藤原氏の滅亡により廃墟となった

平泉の風景を鮮やかに描写した。義経最期の地とされる高館や衣川、そして束稲山と北上川に代表される平泉の景観は、日本人の心の原風景として現在なお大きな位置を占めている。

また、源義経の悲劇に関連して、奥州藤原氏の系譜に属する人々が、『義経記』をはじめとする後の文学作品や芸術作品にも登場した。源義経の事跡を題材とし、義経の役職名である「判官」の名にちなんで「判官もの」と呼ばれる芸能作品は、能楽（能と狂言：2001年、ユネスコ「人類の口承および無形遺産の傑作の宣言」第1回登録）、人形浄瑠璃文楽（2003年、同第2回登録）、歌舞伎（2005年、同第3回登録）など日本の無形文化財の題材としても取り上げられている。さらに、各地には、「義経北行伝説」など義経にまつわる様々な民間伝承が今日に語り継がれている。

4 資産の研究に関する歴史

1) 平泉研究の端緒：地元の知識人による地誌の編纂

近世において平泉研究の先駆けとなったのは、『平泉實記』（1751年）『平泉旧蹟志』（1760年）『平泉雑記』（1773年）などの相原友直の著作である。18世紀後半に地元の知識人によってまとめられたこれらの地誌は、12世紀から18世紀後半に至るまで、平泉の堂社がたどった変遷や旧跡の様相を知る上で貴重な記録となっている。

2) 平泉研究の基礎：国による文化財保護と仏教美術の研究

近代以降は、国による文化財の保護と連動して、中尊寺・毛越寺などの仏教美術に関心が寄せられ、研究が始められた。1876年に明治天皇が東北巡幸で平泉に立ち寄った際に、「国家の規模たる古蹟なれば厚く保護せよ」との指示があり、岩手県は「宝物保存規則書」を作成するとともに、中尊寺・毛越寺の保存事業にも着手した。1897年には「古社寺保存法」が制定され、同年、中尊寺金色堂が特別保護建造物として指定された。1919年には「史蹟名勝天然紀念物保存法」が制定され、1922年には毛越寺跡附鎮守社跡と無量光院跡が史蹟に指定された。このように、平泉の建造物や遺跡については、古くからそれらの高い歴史的・文化的価値が認められていた。

1950年に「文化財保護法」が制定され、1951年には、文化財保護委員会告示第2号の第1号表により、中尊寺金色堂が国宝建造物37件のうちのひとつとして指定された。また、1952年には毛越寺跡附鎮守社跡が特別史蹟に指定された。これ以後、平泉では、多くの文化財が国宝・重要文化財、史蹟・名勝に指定され、今日まで良好な状態で保護されてきた。

3) 平泉研究の基盤拡大：金色堂保存修理・奥州藤原氏の遺体調査と寺院跡の発掘調査

1929年に「古社寺保存法」が「国宝保存法」に改められて以後、指定された建造物の保存修理事業も全国的に行われるようになった。平泉においても建造物の保存修理事業は創建以来随時行われてきたが、その中でも特筆すべき事柄は、1962～1968年に中尊寺金色堂保存修理委員会によって行われた中尊寺金色堂の保存修理事業である。1961年の事前調査の後に建物を直接解体して行われた保存修理事業は、建物部材の用途や建築技術などを調査する機会をもたらし、その後の調査研究が大きく展開する礎となった。1970年には中尊寺金色堂の保存修理工事報告書が刊行され、建築史研究の進展と修理技術の向上にも大きな意義を果たした。

1950年には、朝日新聞文化事業団により、中尊寺金色堂に納められていた奥州藤原氏四代の御遺体学術調査が行われた。自然科学的な手法を駆使した戦後初の学際的調査として全国的に注目され、多くの客観的な情報と信頼性のある手法に基づき、歴史学・人類学的見地から奥州藤原氏

の系譜について明らかにされた。

平泉の資産に関する調査研究において、発掘調査による地下遺構の考古学的研究が果たした役割は極めて大きい。1930年に行われた毛越寺金堂円隆寺の発掘調査を先駆けとして、1952年に文化庁の前身である文化財保護委員会により行われた無量光院跡の国営発掘調査、1954～1958年の平泉遺跡調査会(団長故藤島亥治郎博士)による観自在王院と毛越寺の発掘調査、1959～1968年に行われた中尊寺境内の発掘調査など、平泉では学術的な発掘調査が積み重ねられてきた。その中で、1980～1990年に行われた毛越寺の庭園整備に伴う発掘調査は、11～12世紀における浄土庭園の様相を実証した調査として、日本庭園史を解明する上で貴重な資料を提示することとなった。1984年の毛越寺庭園の調査では遣水が完全な形で発見され、その後の各地の庭園調査に与えた影響は大きい。

これに並行して、基礎的な関連史料の集成が行われ、奥州藤原氏の政治権力に関する文献史的な調査研究も大きな成果を上げた。

4) 平泉研究の発展：柳之御所遺跡の発掘調査と中世都市研究

平泉研究が飛躍的に発展する契機となったのは、1988～1993年にかけて行われた柳之御所遺跡の発掘調査である。それは、一関遊水地・平泉バイパス事業に関連して、記録保存を目的とする緊急発掘調査であったが、めざましい調査成果から柳之御所遺跡の保存運動が起こり、20万人の署名が集まった。1993年に、平泉遺跡群発掘調査指導委員会は柳之御所遺跡を『吾妻鏡』に記された奥州藤原氏の居館(政庁)である「平泉館」と断定し、国に対してその保存を要請した。このような状況を踏まえ、同年に事業計画の変更と柳之御所遺跡の保存が決定され、1997年には史跡に指定された。

柳之御所遺跡の調査は、寺院などを中心に従来行われてきた点的な発掘調査とは異なり、政治・行政上の拠点の中でも中枢を成す施設の全体を対象としたもので、平泉の研究を進める上で大きな役割を果たした。さらに、調査や保存の事業を通じて考古学と文献史学の協力関係も形成され、日本における中世都市史研究の発展に大きく寄与することとなった。

以上のように、平泉の資産に関する調査研究では、仏教美術史・建築史・庭園史・人類学・考古学・文献史学など各分野での取組が相互に他分野の調査研究の進展を触発し、総体として飛躍的な展開を遂げた。平泉の資産の評価は、このような過程を通じて客観的かつ豊かに確立されてきたのである。

・平泉の評価

平泉は、12世紀に、奥州藤原氏により浄土思想を基調として完成された日本の北方領域における政治・行政上の拠点である。6世紀の仏教公伝に続いて大陸から日本に伝来した浄土思想は、清浄化された仏の国土である浄土への往生を説く仏教の思想で、11世紀～12世紀の日本では、現世における安穩を願うと同時に、来世においては阿弥陀仏の居所である西方極楽浄土への往生を願うという他に類例を見ない独特の二元的な性質を持つ浄土思想が盛行した。特に平泉では、自然の地形を存分に活かしつつ、浄土思想に基づき完成された政治・行政上の諸施設とその周辺の農村が比較的小規模な空間に濃密に展開し、総じて浄土思想に関連する良好で優秀な文化的景観が形成された。その構成要素のうち、往時の政治・行政上の拠点施設の痕跡は考古学的遺跡として地下に完全な状態で遺存し、現存する寺院建築や庭園は浄土の世界を具現化した空間造形の傑作である。また、その背景を成した浄土思想の神髄は、宗教儀礼・行事を通じて現在にも確実に継承されている。

1) 平泉の精神的基調を成した浄土思想に関連する文化的景観の価値

12世紀の日本の北方領域において、政治・行政上の拠点として発展した平泉の精神的基調は浄土思想にあった。平泉では、政治・行政上の拠点とその周辺の農村が、浄土思想に基づきつつ、自然地形とも一体となって良好で優秀な文化的景観が形成された。景観の要素として含まれる寺院建築や庭園など様々な浄土の世界を表現した空間造形の作品のみならず、浄土の世界を構成する重要な要素と見なされ、仏堂や庭園の創造を可能にした平泉周辺の自然環境を構成する山並み・河川・水系などの諸要素もまた文化的景観としての価値を持っている。

特に一群の浄土庭園には、背後に浄土の世界を象徴して山が控え、浄土を建築空間として実体化した仏堂、その前面に浄土の宝池に準えて造成された園池の三者を同一の軸線上に配置するとともに、庭園のさらに前面には河川や湿地が位置するなど、共通する立地が見られる。このような河川や湿地は、現世と来世（浄土世界）を隔てる大河を象徴していたものと考えられる。

また、山並み・河川・水系など周辺の自然環境を成す諸要素は、政治・行政上の拠点を構成する諸施設を建設するに当たり、各施設の計画軸線を定める上で重要な役割を果たすとともに、様々な浄土世界を空間的に造形する上で、浄土世界の存在する方位を象徴的に暗示する空間装置として決定的な意義を持った。

一方、浄土思想を基調として形成された平泉文化の精神性は、宗教儀礼・行事などとともに、現在にも確実に継承されている。

このように、推薦資産は、仏教伝播の東の終着点において独自に成熟した浄土思想を基調とする文化的景観の顕著な事例として、世界的に他に類例を見ない極めて高い価値を持っている。

2) 政治・行政上の拠点とその周辺の様相を証明する考古学的遺跡の価値

平泉の政治・行政上の拠点としての特質は、特に地下に埋蔵された考古学的遺跡により証明される。拠点を構成する施設には、寺院及び寺院跡、庭園及び庭園跡、鎮守社及び鎮守社跡、信仰の対象とされた山及びそこに残された経塚等の遺跡、政庁跡などの多様な要素があり、それらと密接に関連する周辺の地域には、荘園遺跡と農村景観をはじめ、寺院・寺院跡、要害の地などの

遺跡が存在する。これらの個々の構成資産の地下には豊富な考古学的遺跡が残されており、さらに構成資産の周辺の地域にも関連の考古学的遺跡が数多く分布している。これまでに実施された数多くの発掘調査の成果や文献史料に関する調査研究の成果により、その歴史上の価値を証明することが可能な平泉の考古学的遺跡は極めて高い価値を持っていると言ってよい。

3) 浄土思想の様相を示す仏教美術の意匠・技術が尽くされた建築物の価値

建築物のうち、中尊寺金色堂は皆金色で装飾された阿弥陀堂である。特にその堂内には、国内外に及ぶ広範な交易・交流により集められた材料を用いて、蒔絵・螺鈿など日本の漆芸・金工技術による装飾の粋が尽くされており、3つの須弥壇に安置された阿弥陀如来などの仏像群とともに、中尊寺金色堂が西方極楽浄土の世界を具現化した阿弥陀堂建築の傑作であることを示している。さらに、現在もなお奥州藤原氏三代（清衡・基衡・秀衡）の遺体と四代（泰衡）の首級がミイラとなって納められている霊廟でもあることから、建築に見られる優秀な意匠・技術のみならず、建築が持つ精神上的の特質の観点からも、中尊寺金色堂は「記念工作物」として世界的に極めて高い価値を持っている。

4) 浄土庭園群の文化的景観としての価値

平泉の浄土庭園群は、自然地形を生かしつつ、浄土世界の再現を目的として創出された極めて優秀な空間造形の作品群である。それらの中には、寺院の庭園として現存するものをはじめ、考古学的遺跡として地下に良好な状態で遺存しているものがある。いずれも当時の庭園の意匠と形態（地割）が現在の地形に明確に表れており、周囲の丘陵や水系などの自然地形とも一体となって、優秀な風致景観を形成している。

特に、仏堂・園池・自然の山の三者が一体となって浄土の世界を再現するところに浄土庭園の特質があり、平泉における一群の浄土庭園には、三者が組み合わさって発展を遂げた歴史的経過と仏の種別による多様な形式を確認できる点が重要である。例えば、毛越寺庭園では、京都の天皇の安穩を祈願して金堂に薬師如来を安置するとともに、その背後に塔山、前面に小礫を敷き詰めた前庭と随所に石組みを施した広大な園池を配置する。仏堂、園池、背後の山の三者は、ともに浄土を表す重要な要素として緊密な関係を持っていた。また、無量光院では、曼荼羅に描く浄土世界の楼阁建築に準えて仏堂を建立するとともに、その前面には宝池に擬して園池を設け、これらの背後には仏堂・園池と東西の軸線を揃えて浄土を象徴する金鷄山が控えている。仏堂・園池・自然の山（金鷄山）を東西の軸線に揃えて配置し、西方極楽浄土の方位を強烈に意識しつつ、その姿を現世に再現しようと企図された無量光院は、同種の浄土庭園の中でも最高に発展した事例として評価できる。このように、様々な浄土の世界を表現した空間造形の傑作である平泉の浄土庭園群は、個々の事例が浄土庭園の発展の経過を明瞭に示すとともに、12世紀の日本における浄土庭園の最高に発展した事例をも含んでいる点で貴重である。

また、浄土庭園には、小さな礫を敷き詰めて緩やかな勾配を持つ洲浜状の汀線へと仕上げた園池の護岸手法や、全体を礫で覆いつつ、諸処に景石を配して流れの実景を再現した遣水の意匠が見られる。これらの意匠・工法は、仏教とともに日本に造庭の思想が伝来する以前の時代に、古くから神に対する水辺の祭儀場に用いられてきた造形意匠とも共通しており、11世紀後期の作庭書である「作庭記」に記す造庭の意匠・工法とも正しく合致するものである。

以上のように、平泉の浄土庭園群は、仏教とともに大陸から伝わった造庭の発想が、日本古来

の自然崇拜思想と固有の自然観を足がかりとして発展したことにより、日本独自の庭園の意匠・工法へと昇華したことを示しており、世界的に類例を見ない「意匠された景観」としての顕著な普遍的価値を持っている。

5) 荘園遺跡を中心とする農村景観の文化的景観としての価値

12世紀に中尊寺経蔵別当領の荘園が置かれ、長く骨寺村と呼称されてきた一関本寺の地域では、14世紀の絵図に描かれた中世の村落景観の構成要素が完全に遺存するのみならず、中世以来の農業を基本とする土地利用形態が、緩やかな発展を遂げつつ現在まで継承されてきた。冬の強い季節風や水がかりに難のある地形など自然的条件に適応しつつ、技術や工夫を加えることにより地域の風土とも調和して形成された文化的景観であり、この地域の特性を最もよく表している。また、丘陵に囲まれて閉ざされた小盆地に農耕地・居住地・信仰の霊地など生業と生活の場が不足なく相互に緊密に関連しつつ展開するなど、「有機的に進化する景観」（「継続する景観」）として申し分のない高い価値を持っている。

以上のように、骨寺村荘園遺跡と農村景観は、14世紀の『陸奥国骨寺村絵図』に描かれた当時の土地利用との照合が可能であることから、世界的に見て希少性の高い文化的景観である。自然的条件に適応しつつ、近世から近代にかけての約700年の間に緩やかな発展を遂げた独特の農耕・居住の在り方を小規模ながら簡潔かつ十分に示しており、人間と土地との持続可能な関係を示す文化的景観として、顕著な普遍的価値を示している。